

技術者倫理・課題 4 レポート

AE19 番 島本倅多

1. マギンの指針 3 を満たせておらず、内部告発に発展した事例を選び、この事例をもとに派生的指針を作れ。

マギンの指針とは、技術者の一般的行動指針を、個別状況に応じて加工できるように、ロバート・マギンが解きほぐしてできた指針ことである。

指針 1. 一般の害ないなることを技術者が敷いている場合、そのような行為をしない

指針 2. 一般の利益に反する害が避けられる種類のものであれば、それを避けるように(少なくとも繰り返さないように)努める

指針 3. 技術的な作業によってある範囲の人々に危険が及ぶ場合、それらの人々に情報を適切に伝達し、危険への合意について人々が吟味する機会を提供。

指針 4. 自分の能力の及ぶかぎり、自分の雇用者や顧客の合法的利益、目的、指示、注文に適うようにする

事例：タカタ製エアバッグ欠陥と内部告発

自動車安全部品メーカーのタカタは、1990 年代に硝酸アンモニウム系推進剤を採用したエアバッグ用インフレーターが「破裂し金属片が飛散する恐れがある」と社内で把握していた。2004 年夏、米ミシガン拠点で行った試験ではインフレーター 2 基に亀裂が入り、破裂寸前となる異常が発生したが、経営陣は試験結果を社外非公表とし、データと部品の破棄を指示したため、公衆へ危険情報が伝えられなかった。

その後もタカタはインフレーター試験データの一部を「美化」して顧客メーカーに提出し続け、2005 年 1 月には米子会社の技術者が「不利な試験結果を除外し改ざんしている」と社内文書で告発、さらに元エンジニアのマーク・リリー氏が「危険性を再三警告したが黙殺された」と米議会への証言意思を示すなど、内部からの警鐘が相次いだ。しかし経営陣は説明責任を果たさず、欠陥インフレーター約 1 億個が世界に出荷され、死傷事故と史上最大級のリコールに発展した。米司法省は後に「試験結果の改ざんと隠蔽は長年に及ぶ組織的行為」と断定している。

このようにタカタは **危険を及ぼす可能性がわずかでもある場合に、その情報を影響を受ける人々へ適切に伝え、吟味・合意の機会を提供する**というマギンの指針 3 を根本的に満たさなかったといえる。

派生的指針

技術者は、担当する技術的作業にわずかでも公衆へ甚大な被害が及ぶ可能性を察知した場合には、①**その事実と根拠データを改ざん不能な形で記録・保全し**、②**リスクを**

技術に関わる全員に速やかに共有してチーム全体の課題として協議・是正策と情報開示方針を決定し、③それでも組織が危険情報の開示や是正を拒むときは保持した証拠をもって権限ある外部機関へ報告し、公衆の安全を最優先に守らなければならない。

2. この事例をディジョージの内部告発の 5 条件と照合し、内部告発の回避が可能な事例だったかどうかを分析せよ。

ディジョージは内部告発の条件として以下の 5 つの提示している。

- 条件 1. 一般の人々に深刻な害を及ぼすと予想される
- 条件 2. 自分の上司に報告した
- 条件 3. やれることは全部やった
- 条件 4. 予想される被害、自分の状況認識に、他人を納得させる証拠がある
- 条件 5. 危険に見合う成功の可能性がある

上記の 1~3 の条件を満たしていれば、内部告発に踏み切っても誰かに非難されるいわれはないということを示している。5 つすべての条件を満たしている時には、内部告発に踏み切らなければならないということを示している。

また、内部告発を行う場合は、持ち込む相手が重要になってくる。内部告発における「成功」とは危険事実の明白化と間接的な状況改善である。そのため内部告発を成功させるためには告発先をよく考慮する必要がある。

本事例における内部告発は回避不可能だったと考える。

ディジョージの内部告発 5 条件との照合

1. 条件 1：一般の人々に深刻な害を及ぼすと予想される
 - 欠陥インフレーターが破裂し、2009 年以降だけで米国で 28 人が死亡、全世界で 1 億台超がリコール対象という甚大な被害規模が確認された。このことから条件 1 を満たしているといえる。
2. 条件 2：上司への報告
 - 米国籍エンジニアのマーク・リリーは「硝酸アンモニウム推進剤は危険」と 1990 年代から複数回にわたり上層部に進言してきた。2005 年には米子会社技術者が社内文書で「試験結果を粉飾している」と告発している。このことから条件 2 を満たしているといえる。
3. 条件 3：やれることは全部やった
 - 技術者らは再試験要求や正式メモ提出など複数の是正手段を講じたが、経営陣は 2004 年ミシガン試験のデータ削除と部品廃棄を命じるなど、社内ルートは尽く封殺された。このことから条件 3 を満たしているといえる。
4. 条件 4：予想される被害、自分の状況認識に、他人を納得させる証拠がある

- 2004 年の試験で破裂が再現されたデータ、改ざん前の試験記録、事故車から回収された破損インフレーターなどが物証として保全され、後に当局へ提出された。このことから条件 4 を満たしているといえる。

5. 条件 5：危険に見合う成功の可能性

- 実際に米運輸省や司法省へ情報が渡ったことで史上最大規模のリコールと巨額制裁金の実現し、危険の公表と被害抑制につながった。是正効果は十分に証明された。このことから条件 5 を満たしているといえる。

上記比較から、タカタ事件は①～③の段階で既に内部告発が正当化される状況に達していた。その時点で経営陣が危険情報を開示し改修に踏み切っていれば内部告発は回避できた。しかし実際には隠蔽が続き ④と⑤も満たされたため、内部告発は「行わなければならない」状況に到達し、回避は不可能となった。

出典

[1] Reuters「タカタがエアバッグ事故受け 2004 年にテスト実施、公表せず」, 2014 年 11 月 7 日, 参照 2025 年 7 月 23 日 <https://jp.reuters.com/article/idUSKBN0IR04W/>

[1] Bloomberg「タカタがエアバッグ試験データ改ざん－ホンダとの共同調査で判明」, 2016 年 7 月 19 日, 参照 2025 年 7 月 23 日 <https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2016-07-18/OACH0V6S972H01>

[3] myCAR LIFE「【新聞ウォッチ】止まないタカタ製欠陥エアバッグ問題、米技術者「粉飾」を内部告発」, 2015 年 11 月 27 日, 参照 2025 年 7 月 23 日 <https://www.mycar-life.com/article/2015/11/27/2659.html>

[4] 東洋経済オンライン「米司法省が指摘したタカタの隠蔽工作の手口」, 2015 年 11 月 27 日, 参照 2025 年 7 月 23 日 <https://toyokeizai.net/articles/-/154528?display=b>

[5] 米国司法省, 参照 2025 年 7 月 23 日 <https://www.justice.gov/criminal/criminal-vns/case/united-states-v-tanaka-et-al-takata-corporation>